

しく卿等は彦根におはすや」と欣びて大に語り大に笑ひ、老齡を忘れて大に歌ふ。其の調或は高く或は低く蓋し言ふ所歌ふところ諷刺の傾き、世を恣に罵倒す。菓子數錢を購ひ別れて粟生の光明寺を訪はんとす、道路は左程廣やかからずと雖も車馬の交通不便あり、一步は一步に草鞋を踏みしめ漸く山門に達し、爪先上りの磴道を登れば左右には霜に飽きたる楓樹數千となく、燦然爛然紅花を欺むく、本堂に詣れば寺宇煥然として、慈雲惠風轉た襟を正しふせしむ、正面の扁額には

元祖慧成大師諸國廿五靈場第十六番札所西山光明寺

露の身はこゝかしこにて消えぬとも心はおあじ花のうてあぞ

とあり、堂後奥へ進むに従ひ頓に幽邃を加へ、一步は一步に異郷に入るの心地せり、空翠の衣に滴るるは仙鶴の涙かと疑はれ、怪禽の空に舞ふは天狗の翔るか訝かる、階磴數十深心院に達す、低徊四顧、去るに忍びず、境の明媚は半尺の筆能く寫し能はず、試に問はむ汝古來多感の詩人紅涙を堪へて今幾樹ぞや。

更らに光明寺を辭して京街道に出で、道の遠近を尋ね歩を倍して進む、されど背に負ひたる革靴は行厨其の他二三の名物を入るゝのみあるも、外套は僅かに一腕を煩はすに過ぎざるも、兩脊將に苦痛を感じ足また棒の如く、到底疾走するを得ざるあり、只時の遅れんことを患ひて足を叱咤するのみ。向月町に入りしは午後一時三十分ありき、富永屋といふに中食す、此を出で行く未だ數町あらず、偶長空一抹の黒烟を吐きて機關車の前面には交叉せる旭旗を翻へし、西馳する瀛車を見る、之ぞ之れ我が叙聖文武ある大元帥陛下が筑紫に行はるゝ大演習御統監の爲め行幸し給ふ鳳樂にぞありける。「止め」「氣附け」「最敬禮」と早々恭しく敬禮しつ山の端にかくるゝ列車を目送し奉る。行けば曠漠たる田野のみ、一も眼を聳しむる觀なく、實に氣倦み足重く、外套皮靴を捨てんといひしも屢々ありき、たまゝ道にして田夫に會せば其里數を問ふ、彼れ等

の應答や人によりて各差あり、曖昧にして一も確信と思はれず、更に勇を鼓し例の軍歌「長門の浦を船出して……」を高唱しつゝ天神橋を渡り、叢叢を出づれば嬉れしや眼瞳に映るもの之れと東寺とあす、此に於てか一行皆躍然競走しつゝ埃を蹴つて京都に入り東寺に到る、羅生門の古蹟、數十の礎今猶嚴然たり、足利三代將軍の建てしといふ五重の輪塔を右手に眺めて寫生する隙もなく、六孫王源經基の廟に詣る、境内廣からずと雖も結構壯麗徒らに裝飾を用ひず、唯一重の石垣を繞らすのみ、再拜して町に至れば人々の往來繁くして最賑やかあり。時既に午後三時、大津發八時の汽船に乗り外れてはと急ぎ、棒の如き兩足に鞭うち、小松谷御坊……正林寺西大谷……を経て新高尾に至り、紅葉一片を帽子に挟み、清水寺を近く望みて志寶山を駆け始めたり、山又山の雜木鬱蒼として繁茂し、仰ぐも青空を見得ざる晝尚暗き地は濕氣を帶び、落葉所々積りて堆をなし、老樹僵れて山路に横はり鳥獸聲なく只溪流の涓々たるを我一行の衆聲、山谷のエコーを聞くのみ、一步／＼に峻を極めて足重く、辛うじて登り行くこと半里弱漸く夕陽の洩光を見る、忽ち我が足下より驚きて飛び立つ夜鳥の一群、こりあへず

霜にあくもみち散らしてたに間よりとび立つ鳥のつばさまじろき

新高尾よりほど／＼峻坂一里餘り歩み來れる頃には夕日も西山に没して遠寺の鐘は早や今日も暮れぬと告げ渡り、時に歸る小鳥あぞ見るにつけ聞くにつけ、定めなき旅の身の哀れさも思ひ出でられ、剩へ枯葉の二片三片はら／＼と吹き落さるゝ等、一句も哉の境遇に非らずいと心淋しく哀れあり、かくて七時頃闇を辿りてやう／＼大津の人家に取り着く、忽ち命あり此の餅屋に入れど、空腹の一行何とて遠慮すべき、茶數十杯を傾け、名物餅十數個を喉に沁らす、其味いふべからず。身を疊上に横ふれば睡魔に犯さる、一行寢ながらに話を始めたり。

きて、又視めんとせず、たゞ一刻も早く着よかしと思ふのみ。
忽ち聞ゆるは津！人も吾も流石にのぞきぬ、唯だ見る、家のひし／＼と、阿漕ヶ浦に續くを、折りしも阿漕ヶ浦砂白く、緑深き磯馴松の木間に、白帆の隠現するは、痛く吾人の心を惹きたり、かくて松坂も、宮川も現の間に過ぎて、一時五分と云ふに、山田驛に着す。

直ちに外宮に参拜す、梢をあらす、嵐はいと神さびて、得あらぬ、尊き心地は身にしみぬ、一の鳥居の右、天を摩する、清盛の楠を視めつゝ、二の鳥居を過ぎて、御社に詣す、古杉森々として茂り、日の光をも遮る計りにて、梢に起る音楽は天上にありと云ふ其れかと覺えて、あたり神々しきこと、云ふ計りなき間に、宮は鎮坐ましませり、九拜し終つて、一同は思ひ／＼に、農業館前に集りて、暫し先發隊を待つ間に、館内を巡覽す、農産農具の陳列ありて、見るべきもの、多かりき、かくて一線の町を、走らむ計りに急ぎて、兎角して、五十鈴橋に着きぬ、橋下には、昔の名残りある、乞兒の三四人、網携へて、錢を乞ふあり、橋のあた、神園を右に曲れば、大山大將の献納にかゝる、三十三珊の大砲横はれり、あたり清楚ある神園の中、殊に緑の色深く榮へたるは、東宮殿下御手殖の松にして、萱葺の殿は、そこゝに棟を現はして、いと嚴めし、神宮衛士の屯所のありよりは、幾千年を経たらんと思しき、大樹杉々として、生茂り、幽邃極あし、かくてそのかみ、倭姫の命の、もすそを浸し給ひしてふ、五十鈴の流にて身を清めぬ。幾千年前より、かはらぬ其の流は、緑深き中より緑の色して、底の小石だに、數へぬべくいと清し、かくて舞殿等の前を過ぎて、社の前に出でつ、大樹森然として茂り、高崇極りあく、神路山より吹き下す嵐は、梢を動かして幽邃を極め白木作りに茅葺の神殿、古き神代のすがたも忍ばれて、神威いともかしこし、我等は御門の外に整列して、恭しく参拜したてまつりぬ、かく我等は神園をあちこち、漫步せし後歸路につきぬ、宿は外宮前、名さへ目出

度き、高千穂館といふこそありき。

六 日

時正に午前三時夢猶華胥の國にや彷徨しけん、されどそも今朝は二見が浦頭旭日を拜せんと思ひ定めたるかりければ、我等は勇ましくも臥床を去りぬ。

四時を過ぐる十分餘と覺えし頃、我等一行は山田の町を後にし進み行きぬ、忽ち目眸を轉すれば四山夜暗く但乾坤の寥々を破れるは路すがら流るゝ水の細音と我等が勇ましき歩調の響のみ、市を過ぎ野路の冷露を踏みつゝ軍歌の聲も勇ましく、不知不識の間村を迎へ村を過ぎ漸く二里強歩みたるに、曉色東天にはの見えて茅舎の邊に鳴くある鶏の聲自ら快げに聞え、六時ばかりに二見が浦に着きぬ。

渚に沿ひ羊腸たる細路が上に小立して、浦一帯の光景を望めば、背に青壁千仞に削成せる斷崖兀として屹立し、前に烟波渺渺萬里に亘り望中只茫々たるあり、これぞ所謂伊勢海にして遠く之を隔つる知多半島一帯は彷彿夢幻の如く、渚近く泛べる布帆猶夢路にあるが如く靜あり。

旭日昇るや遅きと待ちつゝ、我等は前方に進み回りぬ。岩石基布羅列し千種萬態奇あるあり怪あるありて水面に隠見せり、中に兩大巖ありて注目繩之を列ね、一の上華表峙ちいと神々し、

忽ちにして一輪の旭日鏡の如く瞳々として山上にあらはれぬ、無數の光輝忽ち照耀して、將た金鼇の海中に走るを覺ゆ、其雄大ある秀麗ある光景、畫に書かくも筆及ばざるが如し、況や我等が吞筆をや、やがて我等は七時五十分、熱田に行かんとて蒸氣船に乗じぬ、笛聲嘹々舟は一抹の長烟を二見が浦の天に残して進みゆくあり。

波を打ちつ波に打たれつ舟進み行く程に、二見が浦は已に夢の如く杳々の中に消え果て津に寄港しぬ。

天氣清明にして天光海色只碧一色にして心自ら清爽、波の上に波越えて水散らそあたり、千鳥の飛びかはす様見えていと面白く詩情頗る動く、さればにや、甲板に吟詩の聲もたけおはに、波濤の音をも奪ふぞかし。八日市其他二三の港を過ぎ去りて舟は已に伊勢海の半圓周を航したりと見えたり、時しも日は西峯の天に傾き夕照水に映じて鮮あり、不圖目眸を回せば、帆檣織るが如く目に横はり、烟雲暗澹天を蔽へり、今舟は熱田の岬に航進しつゝあるあり、忽ち汽笛の聲猛らけく終に我等は上陸しぬ、時正に五時五十分あり、直ちに熱田神社に參拜す、喬松老杉鬱として殿宇を擁し、自ら莊嚴の氣神秀の韻を帶ぶ、此に於てか暮色蒼然たるに我等は暗ある路を辿りて、將に名古屋に着し富澤町四丁目河内屋次郎方に宿せ、武内賢吉氏の父君宛ら我等の宿所を訪はれ、茶菓を寄贈せられたるは、我等の大に謝する所あり、晚餐後市街に散歩すれば、兩側の柳絲風にあびき、名古屋城頭月清し。

七日

起床六時半、今日は早朝より清洲に向ふ可きありしが、折りしも今日は、陛下の當市に御着輦あらせらるゝとの事にて、鹵簿の盛儀を拜せんには、且つは昨は日暮れて後に着きし事とて、見物もかおはざりければ、俄に今日は、市内を見物して、陛下の御着輦後、岐阜に向ふ事とありぬ、卒業生大竹氏は、當地に、在留せらる事とて、案内の勞を取られしかば、痛く好都合ありき、今併て其勞を謝す。

かくて吾等は、九時頃大竹君の案内にて、大厦高樓、ひしと并びて、人馬絡繹として行きかふ、廣小路より始めて、地方幼年學校、さては兵營とぞ、觀覽しぬ、たゞ憾ありしは、城内參觀の許されざりし事にて、人々は、徒に古松茂るかあたに、黄金の鯢、日の光に輝きて、屹然天をつく、五層の天主閣をのぞむのみ、かくて、あちこちと、さまよひて後、市立博物館を巡覽しぬ、所柄とて、瀬戸物多くして、餘りに目に立つ程

のものもあかりき、折りしも既に正午ありければ、近傍の某院にて晝食しつ、食後は自由散歩を許されて、四時と云ふに、青柳町に集合して陛下の、御着輦を待ち奉りけり。

やがて、時ふるまゝに、追々人々は、御通輦を拜せむものとて、路傍に集りて、西側は兵士、東側は學生にて、拜觀の庶人は、其の後に並び立てり、吾等は某小學生徒の後に、整列しぬ、かくする中に、美しき馬車に乗りたる貴人、さては正装の陸軍士官とぞ、乗馬にて、あちこちと、走るさま、勇ましくも、美し、七時にもありぬ、人々はますます集れり、今は身動きもあらず、折りしも一發の大砲は、中天に轟きぬ、次で一發、また一發、百一の皇禮砲は殷々として、轟き渡りぬ、人々はしづまりかへりて、あきが如し、折りしも士官の號令勇しく、氣を付け！……………捧げ……………銃！

騎馬の警部二人、前驅をつかうまつりて、天皇旗を捧ぐる、近衛騎兵、同じく前驅を、つかうまつりぬ、次ぎに、鳳輦は徐々と進みぬ、龍顏殊にうるはしく、拜せられたるも、かしこし、供奉の人たちに續きて、第三師團の騎兵は、長き氷の刃を抜きて、供奉しぬ、御幸過ぐれば、兵士は徐々と動き始めて、人々はちりちりにあれり、いでや停車場へと、吾等は急ぎぬ、至れば定刻より、汽車は一時餘り後れたりと、云ふに止むかく、八時二十分と云ふに、岐阜に向ひぬ、晝の勞一度に出て來て、清洲もものは、中ば夢にて、岐阜に着き、停車場前の中島屋と云ふに投しぬ。

因に記す、今日投宿の後、平瀬、小川曾田三先生より、一同へ、數多の密柑を分與せられたり、今茲に、併て之を謝す

八日

今日は四日も旅ねの夢をむすびたらんに、午前六時少し過ぎつる折しも、夢より覺めた少年、流石は勇まし

く、衾褥を出で朝食を待ち顔に整坐したるは殊勝なれや。先づ立ちて客窓を排し眸を東方に回らせば、旭日
瞳々正に東山の上を離るる三竿、長空萬里水の如く晴れ渡り、遠林に鳴くある鶉聲も自ら樂しげに聞ゆ、此
に於てか少年の意氣頗る盛なり、やがて午前七時半、漁笛一聲岐阜を發す、忽ち山動き水走り青を送り翠を
迎ふ、轢々轟々の響も二十分ばかりにて漁車大垣に着す、此に於て下車し直ちに南方養老山の方向に向ふ、大
垣市内を通過し、田圃の間を辿り行く、道路蛇の如く折れ蛇の如く屈す、或は流水に沿ひ或は田圃を縫ふ、時
しも秋の半ば過ぎあれば、路を挟む蕎麦花正に咲き満ちて、一望白糲糊、宛も雪かと疑はる、其間柿の實の紅
あるが曇々として枝に垂たるは實に春の色に譲らぬ秋郊の眺にこそ。

我一行は秋光を帯びて紫色を呈せる遙か前方ある峯巒を目當とし進み行く程に、不知の間に綾里小畑多藝等
の諸村も打過ぎ二里ばかりも歩みたれば、足も漸く疲れを覚え、三々五々路を辿り行く様、農夫に引かれ行
く牛の歩みに髣髴たり、されば日も早や正午を過ぎぬ、さる程に漸く高田町を経て養老村に入らむとせしに、
歩一步と高まりゆく坂道へかゝりぬ。

これはこれ、養老の下流にや、一溪の細流滾々として流れ來り水殊に清冽更に双眸を前方に放てば、紫色の
峯々笋籜の如く峻として高く聳え、彩霞一抹山下に横はれり、暫くにして養老公園外に至る、園内總て楓樹
にして、樓屋錦繡の間に隱見し、甘泉湧出し滾々として流れをあす、魚鱗怡然として其間に游泳せり。

傍ら石碑あり、

「名にひゞく泉や徳のどこしあへ」

「むすぶより早齒にひゞく泉かあ」

魯松庵

芭蕉翁

園を出で羊腸たる山路を経、溪流に架せる土橋を過ぎ、歩む事十數町にして養老瀑布に至る。

青松紅樹綺を織り、懸崖削るが如き處、百尺の瀑布高く懸りて、白虹の横はれるが如く、萬点の明珠空に飛
散し、奔流石に激して轟々般雷の響をあす、壯絶快絶。養老の梁に曰く、瀑布の高さ十丈五尺幅二間餘ありと
其傍らに石碑あり、其面に養老美泉の辯を刻せり。今この瀑布の由來を尋ぬるに、養老の梁に記して曰く
「元正天皇の御時美濃國に貧しく賤しき男ありけるが、老たる父を持ちたり、この男、山の草木をとりて、そ
の直を得て父を養ひたり、この父朝夕あながちに酒を愛しはしが、これによりて男ありひさごといふも
のを腰につけて、酒をうる家に行きて、常にこれを乞ひて父を養ふ、或時山に入りて薪をどらんとするに
苔深き石にすべりて、うつふしに轉びたりけるに、酒の香しければ、思はずに怪しとて、そのあたりを見
るに、石中より水流れ出づる事あり、その色酒に似たり、汲みてあむるに、めでたき酒あり、うれしく覺
えて、その後日々これを汲みてあくまで父を養ふ、時に帝この事を聞しめして靈龜三年九月にその所へ御
幸ありて御覽じけり、是即ち至孝の故に天神地祇あはれみてその徳をあらはすと感せさせ給ひて、後に美
濃守にあされけり、其酒の出づる所をば養老の瀧とぞ申す、且はこれによりて同十一月に年號を養老と改
められける」

猶養老瀑に關する古人の詩二三を録す、

懸瀑曾聞養老奇。銀河直下九天垂。他年若得一携杖。傾盡吟囊洗拙詩。

董堂圃

養老改元光史編。至今百丈瀑布懸。寒風珠玉噴爲雨。白日雷霆轟在天。

梁川星巖

養老元年養老山。山頭飛瀑白雲間。定知銀漢溢分水。却恠身從廬嶽還。

江馬天江

我等は一亭に憩ひ携へ來りし握飯を喫し、午後二時名殘を養老山に止めて、關ヶ原の方向に路を取る、左轉
右曲山路を下り野徑を辿り行くこと三里半あまりにして關ヶ原に入らむとす、丘陵遠く亘り千章の松樹古色

蒼然、この古戦場を過ぐるもの誰が感慨あからむ。
次で停車場に至り汽車の来るを待つ、七時九分汽笛一聲關ヶ原を發す、いで今宵こそは故郷に歸り親しき人にも旅の物語せんあど語らふ程に、ふと窓外を望むれば一片の斜月山峯の一角に高く懸り秋天朗らかあり、時に鴻雁哀叫月に點して西方の空に飛び過ぐ、この時この聲を聞く、誰か旅魂の故國に飛ばざらむ、已にして汽車彦根に着す、こゝに於て一行分散し各々家に歸る、時に月猶ほ金龜城頭に懸り髣髴の間に我校を認めたるは愉快中の愉快ありき。

永源寺紀行

飯村生

秋色漸く深く、萬山の霜葉錦を飾りぬ、永源寺の秋光、さこそ忍ばるゝ折柄、本校修學旅行の舉あり、第三年級以下は、愈高野へ向ふことに定まりぬ、十一月七日は、その當日あり。

眼さめ起き出づれば、天猶暗く物靜あり、早々用意を了へ、學校に至り、六時校門を出で立つ、金龜山の松は緑の色深く、衆鳥梢に鳴いて、吾人が此行を送るに似たり。既にして停車場に到り、間もなく列車に乗す汽笛一聲耳朶に響き、車は徐々として彦根を離れ、田野の間を馳せ、森林の中を走り、程なく新町につき、既にしてまた發しぬ、車窓を開いて外を眺むれば、金龜東山に昇り、三五の茅屋散点する處、炊煙低く搖曳して、一入秋の景色を飾りぬ、火輪輾轉此寂寥を破りて、馳すること數十哩、高宮、豊郷を過ぎ、愛知川、小幡を経て、早くも八日市につきぬ。茲に於て車を下り、列を整へ、それより高野へ向ふ。一行八日市を離れば、路傍一帶滿目蕭條たる森林の間に入りつ、或は年老いたる松、或は丈高き杉、或は名も知らぬ樹木の紅葉したる、かくの如きもの、幾處あるを知らず。或は高らかに詩を吟じ、或は勇ましく軍歌を歌ひ、西法寺、立石、蘭畑の諸村を過ぎ、暫時休憩し、再び列を整へ、如來村を後ろにして森林を出で、進むこと數丁にして、山上に入らむとす、右傍に碑あり曰く、

蝶鳥の知らぬ花あり秋の空

芭蕉翁

このあたりの風光凡からず、前には清流を隔てゝ青山あり、紅葉は青松の間に交はり、濃淡その宜しきを得たり、此地にして此句あり、吾等翁の風流に感ずること切ありき。間もなく愛知川を渡り、高野を過ぎ、山麓をめぐり、遂に永源寺時に達しぬ、幾百の石磴を登れば寺門あり、四邊の楓樹無慮數千章、老幹半は已に霜に飽く、此に於て列を解き、かねて用意の辨當を喰ふ、時正に午に近し。

此日や貴顯紳士の車を列ねて來り遊ぶもの極めて多く、或は樹下に酔を買へる仙客あり、或は旗亭に詩を賦する騷人あり。太平の氣恍として双眼に映ず。俯して山下を瞰へば清流あり、呼で音無川と云ふ、蓋溪流音あきを以て名づく、青松紅樹其影を落し、水底猶よく秋色を彩る、實に奇景あり。神身恍然として仙境にあるが如く、精神爽快、吾人九天を望んで啞然たること稍久し。予嘗て聞く、橋を渡りて南堤より全山を眺むれば、實に絶景ありと、即ち石磴を下り、水を渡りて堤下の岩頭に踞し、仰て全山を望めば、實闊は、淡煙紅濃翠の間に隱見し、飛樓は錦帳繡幔の中に出沒す、加之夕陽之に映し金風之を動かすその風景の絶佳あること、實に拙筆の盡し得るところに非ず。去て舟を浮べ、流れを遡る、兩岸の奇岩怪石、或は高く、或は低く、或は臥牛の如きあり、或は畫屏の如き、或は石頭流水懸つて瀑布とあり、或は岩腰樹木を生じあり、審に其形狀を寫す能はず遙に上流を望めば青山遠く連り錦雲幾簇其間を點接し、其盡くるを知らず。遂に流に任せて川を下る願れば奇岩怪石、吾を嘲笑するが如し。

既にして午后二時過ぐる頃、愛知川原に集合し、前路を蹋みて八日市に歸り、再び列車に乗ず、黒煙一條長蛇の如く、暗を縫うて走りぬ、一行互に今日の清遊を談する間に早くも彦根に歸り着きぬ。

新體詩

鑿の光

第五年級 澤村 胡夷

蘆のはなさく湖の畔に二人の男住みけり。互にへだてふ語れりしが共に縁やうをかりけむ、一人は三十里のかなた、あしの華散るてふ里にゆきて湖ある國に住まふかりぬ。程へて居残れる男、かの男の、鑿の光をたふふる身となれるよし聞きていたくよろこび、やがて詩といふものを作りてかの男に送りけり。

南の窓の日あたりに、
首うかだれて塑像の、
眉のひそみを彫らむとき、
藝術の神の與へたる、
奇しき力を君知るや。

あゝほまれある藝術の、
花さく野邊にたゝすみて、
やがては神の寵うくる、

鑿か。かゝやく、右の手に、

あした荒野に鋏とりて、
せまき壑路のゆきかひに、
雲の行方を追ふあかれ、
草間がくれにくちあはの、
炎吐きつゝひそめるを。

泣くか、幸あき人の子の、
運命は神のみ手に歸す、
たゞ悲しびの歴史を、
こゝにもあげく友ひとり、

君の思ひを身にしめて、
あつき涙を拭ふとき、
弾くつま琴の弦きれて、
希望の星の光さゆる、

さらば諸火の消えうせて、
下界はとほに闇のそこ、
世に虚飾のたゆるとき、
君、光榮の冠きて、
かゝやく鑿をかざしつゝ、
美しきたくみの野をてらせ。

いま沈む陽に眼をあげて、
葦間に消ゆる舟追へば、
さても思ひの堪えずして、
あやしく胸のくもるかゝ。
くもるこの胸、かりがねの、
ほそき咽喉にそと秘めて、
あした、浪速のさゝれ草、
花散る岸に鳴かさばや。

鳴く聲きかば君しほし、

かゝやく鑿の手をどめつ、
寂しき笑を頬に浮けて、
わびしき友の幻影しのべ。

美しき夕陽の影させど、
見よ、野に、石は冷ゆるもの、
冷えしこの身の酔ふべくば、
かめにたふふる酒あれど、

悲しみ多きこの胸の、
憂愁をやらむ術をのみ、
たゞ永久へにかの嶋の、
かあたに消ゆる帆の影を、
もゆる希望にたどりゆく、
たくみの野邊の君とみて、
『幸多かれ』と吾は祈りぬ。

花賣る少女

第五年級
野村 靜軒

明星のひかりうすれて
句ふ旭あけの照りはたゞけば
くれあゐに彩る雲よ
紅にいろどる野べよ。

草萌えてはる風かやふ
さゝ川にしのを濡ぬして
朝あゝ花めしませど
辻々に呼びてぞきたる
うらわかき二六の少女
憂にしづむあどあき頬の
笑靨えはには未だあれざる
清き子の胸こそ騒ぎて見ゆるあれ。

香に匂ふはかを束ねて少女子はひとり言しぬ

曉のつゆまだしげき
美しき色とりぐの

春の野にわれ來てつめば
草花も籠こにみちぐぬ。

つれかくも春の女神の
いで巷路まちにこを負ひ行きて

手うろしねにあれる花をつみたり
粳の價に賣らん哉。

朝夕の麻あさのころもに
世にぬけぬ紅あかき涙を

おもしろき佐保姫の玉庭には錦の袖にしぼらむよりは。

うま人の涙をしらぬ
わが爲めに憂しと思はぬ

塵の世にあそばんよりは
花の邊ぞいとばうれしき。

桃色のもすそかゝげて少女子のはかに語りぬ……………

はなびち
花片のつゆは何かや
情あきわれの手業をてろさ

あさましきわれの心を
かゝしびて泣く涙かも。

さばゆるせ救せよ汝
孝のため利のために賣る

病む母にくすりかふべし
盲人とわをあきらめて。

花よ汝わが爲めあらば
あらかねの都の人の

かか／＼にものお思ひそ
手にふれて花瓶にあそべ。

汝が露を生命とたのみ
あさへ世にありて在さば

汝が宿を寄家とたのみ
われ何を欲しといはむや。

汝とわれをあはれむ人の
蒼白き寝さめの顔に

世にあらばとく買ひ給へ
あぢきなき世をばかちて母待ちまさん。

賤ヶ岳の夕

第四年級 中川 醇

没む陽は琵琶のかた
黄金いろ奇しき光を

雲迷ふ高嶺を越えて
静かある湖にぞ投ぐる。

美しきかお白帆の影は

たそがれの湖の面に

人の子の思ひをのせて
一つづゝ消えてゆく。

賤ヶ岳余吾の湖べに
夕暮れの道や迷ひし

佇むは旅の子一人
松かげに額をぞ垂るゝ。

麥の風たもとをうちぬ
若き子の思や悲し

淡ぐものあがるゝ空に
いと高き吐息ぞつける。

つはものゝいくその夢は
紅の波間におどる

わきかへる夕べの湖の
余吾の夕、思ひに堪えて。

袖しぼる旅の子が
東の星の光ぞ

憂愁の涙のまゆを
さびしげに照らすかお。

和歌

橋上春風

文廼舎歌麿

咲き匂ふ橋のあかたの梅が香を誘ひて渡る春の川かせ

春 曙

大空も一にかすむ山の端の花よりしらむ春のあけぼの
都の花盛り

一昨日は上野に今日は向島あすは飛鳥の花にくらさむ

修學旅行

草まぐら旅のかりねの夢にさへ學ひの道をたどりてそ行く
雨 中 花

入相のかねもしめりて降る雨に盛りの花もうつろひにけり
窓 鶯

窓にきて書よめとてかうくひすのあくある聲は朝あ／＼きく
野 若 菜

けふもまた若菜つまんと少女らか袖ふりはへて野へに行くらむ

春の水

木村 仙 夢

渡殿の夕そ 〇 ふる櫻雨頬のはてりをけすに甲斐あき

春の野やさゝやぎの聲しきりかり若き小草の風に浮れて 〇

うらわかき素絹のしやみの物思ひ緋桃の月よふさはしといへ 〇

若き子の都ぼこりに心うごき今はこれまでのさみしき村居 〇

梅かほるいでゆの宿ぞ静かある樓の欄干振袖むつる 〇

北に立つ伊吹は父よ琵琶は母よこゝに生れしひと情あれあ 〇

夜はふけぬ天地いてぬ北十里雪の伊吹は神の御くらよ 〇

と見るうちに月はおぼろに星は落ちてそのいたゞきゆとみに榮映ゆ 〇

友のしやみに花笠きせてゑむ椽の櫻にけぶる小雨宵月 〇

福永作十郎

なにくれ集

野村義雄

○ 櫻さく木の下蔭に馬士の謠霞にきゆる春の山里
○ 詩を誦し小川づたひにどめくれば水車ありて白桃の咲く
○ 竹生しま多景しま淡く雲にきえて春雨しろし琵琶の湖
○ 鐵道のふみきり越えてうかゐる子が前後も知らずとんぼつる見ゆ
○ 風ぬるき社の前に土俵つきて角力ふうかゐのたくましき哉
○ ゆく春の姿あるらむ風もあきにおそろさくらちる古郷の庭
○ こま犬に梅ちりかゝる夕ぐれに鶯きかく神の廣前
○ あめ晴れし朧月夜の苗代に蛙も歌の種やまくらむ

がらくた集

第五年級 廣瀬紅々

○ 劔取り怒る我が世を折にふれ袖絞りても猶戀ふる哉
○ 吾おちし世や弱へし誰に問はん末の世茲に三千年の秋
○ 天地の愛の衣に包まれてさて詠む歌は星とかゝやく
○ 懷に悲哀の詩ありこゝに多年いつか人あり讀みて泣くらん
○ 天地の白き衣にはゝ笑まん浮世は赤き戀の衣よ
○ 秋たけて時雨を誘ふ北の風伊吹の山に琵琶の水見る
○ 春の宵白き衣の神一人梅の林を笛吹きて過ぎぬ
○ 歌は花調に鶯のふしあらば惱ある子もとはに笑むらん

花生けてさて歌詠めば寒からじ狭き書室に母が情の火

春の歌三首

第三年級 飯村 祐念

年月の過ぐるも知らぬ山里は梅か薫りにはるや知るらむ
都には稀にもきかぬうくひすの聲おもしろき春の山里
芹洗ふ小川のはとり日はくれてあたり長閑に春雨そふる

俳句

すみれ草

第五年級 野村 静軒

旭の床にもれて香ふや花すみれ
はる風に文机のちりはらひけり
ひらくと梅のちり込む小窓哉
自轉車おふて渡る人あり春の水
梅さくや初瀬の茶屋のいそがしき

亡き友のうつしる見たり花の朝
茶の花や黄檗山のみぎひたり

第四年級 北川 九一郎

真田幸村

幾度も見へつ隠れつ霧の不二

冬籠

落城のあとやきつねのふゆ籠

霜

自轉車の跡一と筋やはしの霜

寒月

寒月やとみよりとぎき小塚原

雀の子（鳥の名五つ讀込みて）

とびぞめやひわたかゝらす雀の子

水鳥

水鳥や流るゝ草をかりのやど

雲の峰

水を見ていあかく馬や雲の峰

峰造るくもや柳のかせはあれ

春二首

第四年級 小池周藏

塗りかへた端艇の臭や春の海
菅笠の古びも知らず春の旅

俳句三首

第二學年 丸山房太郎

見る度にやせるや道の雪だるま
重箱で谷の水くむ花見か
ゆび折りて日曜待つや花の茶屋

漢詩

左の祭文につきて

思廻せば今より十五年のむかし、明治二十二年の春、從二位子爵森文部大臣、西野文太郎てふよのしれものに失はれ給ふ、來む年は、御國にはじめて國會てふもの催さるべしとて、そのいそぎに世の中ごよめく、

御門には 二月十一日紀元節の御祝事にかてゝ 憲法發布式てふためしあき大典を行はさせ給ふ おとゝの失はれ給ひしは 其朝きらやかにさうぞきて まうのぼらむとし給ひたる時ありきと 人のいふは誠にやあらむあかうたておご世の常の事あり おとゝ御性 すぐれてさかしう 何事にもはかしくおはし わきて教育てふことをまつりごち給ふに御心のいたらぬことやはある つねに智徳の三育あるは氣質鍛鍊をいふことをあげつらひ給ひ 後の世のことをもおぼし掟給ひたること多かり 今もおとゝの御心よりいできたる事 あはいと残れりとかや 失はれ給ひしとき 御門おぼし歎かせ給ふこと大方あらず 世の中教の道にかゝつるふもの 驚悲しむさまいふばかりかし 堺市の教育會にても くさくしつらひて そが弔祭をいとおむ おのれ幹事の職に並居り 諸人より祭文よめとのすゝめもだし難ければ おふけかくも これをものして 涙ながらに讀上げ侍り 後にもこの月のめぐりくるたび すぎにし憂をしのばぬことやはある さればいまそのふる文を取てゝ この會の雜誌にのす 見む人 文のきずを咎給はで これやがておとゝの歴史てふものゝ 一はしとも見給ひてよ 癸卯の歲二月二十六日樋口樸堂申す

祭森有禮君文

維明治二十二年二月十九日泉州堺市堺教育會幹事樋口逢造 謹以清酌庶羞之奠 祭故文部大臣從二位勳一等子爵森有禮君之靈 嗚呼哀哉 始聞人言 一信一疑 聞而又聞 果不我欺 茫然自失 撫胸長噫 況是一朝爲兒徒瘦 醫藥無効 終失雄姿 嗟乎嗟乎 君之智 聞一知十 夙稱神童 薩藩選秀 君在其中 遊學海外 二年功成 歸朝忽握外務權 又任米國辦務使 裁決無礙滯 恰如就下水 一使清驚李伯 再赴英恐廷士 尋任教育 學制綜理 遍諭四方 斯定國是 嗟乎嗟乎 君之德 推誠接外人 名聲異域喧 居常論氣質 所到無不言 教官奉其意 學生感其恩 嗟乎嗟乎 君之體 骨格清勁 肌膚亦肥 蒼髯鬢々 眼目有威 如玉其溫

如山其巍 嗟乎嗟乎高矣君之才德 施之事業 事業悉張 示之世人 世人屬望 舉手投足 百揆宣揚 厥業日新 厥志益剛 國家賴君 教育盛昌 惜哉罹禍 歲纔過強 功績何大 壽何不長 嗚呼哀哉 恨永不央 嗟乎嗟乎 君之榮 天皇陛下 痛悼甚惜 贈正二位 且賜金帛 詔言謫々 以慰君魄 誰謂不壽 千古有馨 靈果有知 亦可以瞑 嗚呼嗚呼 利根之水 今永滾々 秩父之峰 今久崔嵬 君之斯逝 何不再來 墨堤之櫻 東台之梅 寒去暖到 艷花將開 君之斯逝 何不再回 嗚呼哀哉 尚饗

鳳洲土屋先生評 歷舉君之智德體善寫其實 而有情有韻讀去動人可謂得躰者

春日閑吟

第四年級 中村竹坡

春曉

曉色微々望欲迷。前村後落淡烟低。黃鶯喚覺閑窓夢。月在斷橋花柳西。

野望

青山落日鳥飛斜。淡々炊煙三兩家。停杖古欄橋畔立。一灣春水蘸桃花。



雜錄



◎有聲無聲 (一)

新井無二郎

◎多くて見苦しからぬは、塵塚のちり、と兼好は云へり。こはその塵はどの價だにあき空言あれば、土の底ある蚯蚓の吟聲、あるが如く、あきが如し。されば、言多けれども君子の耳を妨ぐることなく、その聲甚低けれども、聞き漏る人に損ある事なし。

◎善庵隨筆に、右田三成をカヅシゲとよむべし、といふことを記せる次に、織田信雄をノブヲとよむは誤りにて、ノブカツとよむが正しきよしを考証せり。然るに安齋隨筆七卷には、ノブヨシとよむべきよしを考証せり。その論據はいづれも似よりたる口ぶりにて、いづれをよしとも定めがたきが如し。これらによりて見るときは、三成をカヅシゲとよむべしと

いふ反証も、暫く異説としておく方よからんか。古き人名のしりがたき、これのみにとはとまらず。

◎豊臣秀吉が、中國に毛利の陣と對せる時、毛利氏は上方の變に乗じて、あどて秀吉を追撃せざりけむとハガユシ、愁ある義戰をかけたればこそ、真正なる秀吉の伎倆を見ずて終りしかれ。

◎英雄の資をもちながら、小意地のために亡びたる淺井長政よ、惜むべく、また氣の毒あり。

◎此ごろ子規隨筆をよむに、世人大方信玄と謙信とを較ぶるときは、誰も謙信の人とかりを揚げて、信玄をおどすは一あるが如し。道理はまことにさることあれど、いがあるゆゑか、余は信玄の方が好きなり、その理は我自ら知らずといへり。子規子の言おのれも、まことに同感あり、おのれは此の外に義經と義仲とを比ぶるときは、軍略氣象共に義經の方が本會に勝れたれども、何ゆゑか義經はきらひにて義仲の方が好きあり。その理は我自ら知らず。

◎元龜天正の間義戰をし、義戰あるものは獨り徳川

家康が長湫の役あるのみ。こは世人の治く知る所ながら、そは權畧を意味せる義戰にて心からの義戰ならじ。心からの義戰は、他に只眞田幸村あるのみ。幸村の終始大阪方の爲に奮戰せるは、全く恩顧のためせしにて、はしかくも幸村の人物風采は、後世武士の想望する所とありて、強きを挫くてふ俠客者流の典型とはをれりけり。幸村の父昌幸は未だ義に與まど云ひがたし。

◎文字を以て滅ぶとは支那國の云ひか、實に事新しく云ふにはあらねど、支那文字の馬鹿に六つかしきよ、日本學者の終世漢文にいたづく人も、終に字典を手離す能はず、かく六つかしきはイヤナものご知りながら、今日青年が文を作るを見るに、意味あき處にもわざと、難文字を列ねたがるは、いかある心あるらむ、こは青年の罪あらじ、當代文士を以て自ら任ずる學者先生たちが、たしかに此の毒を傳播するに勉むるを見るぞうたてき。

◎歌人と云ふ者にはありたくあき者あり。今日の所

る書名と、初頁の序文とを視る、さて後本文を読むことあり。折々はしがきをのみ視て書を抛ち、あごでこのやうある、つまらぬ書を借りては來るぞ、さて眼鏡越しに白眼まることありき。小説にても馬琴のあご、もち歸るときは、この人のは大分上手ありと云ふことありき。余は中ある挿畫のみ見るありしが、ごこのおもしろきにかと、拾ひよみに、よみたりけるが、やう／＼に馬琴の文の趣味を解するやうにはありけるあり。書名と序文にて、本文の價值は知らるゝかれど、今日のやうに無責任ある書の、溢れ出づる世には、書名と序文とはまことに立派あれども、本文は一讀の價值だにかく、買ひての後に呆るゝこと多し。新聞の廣告にては、書は求めがたし。故に此頃は書名よりも序文よりも眞先に本文の半頁までよみ見て、價を定むるより手段はあきかり。

◎讀書の力は精讀にあり、熟讀玩味して應用の力を養ひ、さて後に多讀をあして、博覽の資とすべし。

謂歌人といふ者を見るに、大方品性の下劣あるのみ多かり。かくの如く下品ある人の、社會を歌ひ人世を詠ずればとて、いかばかりの益をかさむ。歌に瘠するとか、歌に病むとか、常に云へれど、一向にそれほどの名歌をよめる人なし。歌人と云ふ者の歌よりも、歌人からぬ人のうた、却りて佳調多きものあり。

◎民友社の十二文豪中の荻生徂徠は、酒好にて常に鯨飲する者の如くに云ひつれど、常山の文會雜記には、徂徠は下戸ありとあり、書物と云ふ者、あまりあてにあらす。

◎漢楚軍談は英雄豪傑雲の如く、其人物の數に於ては、三國誌よりも勝れたれども、よみて面白きは三國誌の方あり、張良樊噲よりも、孔明張飛の方が愉快の人物のやうに思はる。

◎余幼時常に他より、書を借りて見けるに、父時々手に取りて視ることあり。ごのあたりを見るにかと思ひて、ひそかにさしのぞけば、いつも必ず表紙を

精讀と博覽と相まちて、初めて大成するありけり。今日の青年或は多讀をする人あらむ、精讀に至りては、十中八九は更にあし。

◎徳川時代の漢學者、碩學鴻儒の輩出せること、まことに秋の野を飾れる花の如しと雖、その著述概ね漢文漢詩にして、國文國詩を遺しおかざりしは遺憾といふべし。若し彼輩が半生の力を國文學に尽したらんには、今日の國文學は、いかにある点にまで發達してあるからん、とあたらし。但し上田秋成の如き能文の士も、其性の偏せるがために、おのが才を伸べて國文の光輝を發揚せざりしは、最も憾むべし。時代の影響はすべあきものか。

◎徳川時代の漢學者等は、俳句小説家等の國文學者をば、俗學とし卑め侮りつれど、自然の發達を遂げて、國文學に貢獻せるものは、大抵この卑められつる俗文學者あり。特に時代風俗の觀察は、到底漢學者の及ぶ所にあらす。緻密なる事業を後世にのこして、風俗史の材良たらしめたる者は、漢學者の手に

かりしは春台の獨語位に止りて、他は悉俳人小説家の恩恵を仰げるに非ずや。

◎漢文は貴族の家庭にのみ限られたり。到底平民の家庭に入りて、國家教育の任を果す事能はざりしにあらずや。徳川光圀の^{大日本史}も、若し三宅觀瀾の議の如く國文にて記されたらむには、國民教育上、いかに便利ある者にてぞありけむ。あたは國民の至寶を、専門家以外に無用のものたらしめしは、國民智識の上に影響すること甚しといふべし。

◎此の点に於て白石、益軒の二先生は大識見家ありき。特に白石の如きは政治家の頭腦を具へたるがうへに、歴史家として、語學家としても、文章家として、詩人として、あらゆる方面の豪傑ありき、彼をしてもし今日に生れしめばいかむ、二十歳にして文學博士法學博士の學位は、容易に彼が手に落つるからむ。彼は實に日本歴史上の、學者としての最大人物ありき。

◎魚釣りの上手と下手とは、屢々其人の性質を反映

せしむ。余の兄世に在りし時、讀書に倦みし折は、常に竿を肩にして谷川に釣る、しかも一尾の魚をだに釣り得て歸りしことあし。魚釣の下手は、必其人の短氣急性を示すものあり。

◎短氣急性の者は、事に堪ふること能はぬにやと思ふに、文學美術を好める道に向ひては、また驚くばかり細心緻密ある者あり、我兄まことに此部に屬せりき。

◎明敏剛俊の英主として、徳川氏の肝を寒からしめんとし給ひつる後光明天皇に、朱子學を講じ參らせしは、淺香彝倫菴といふ先生あるよし、斯文源流には記せり。如何ある人物にかありけむ。その人平生の性行知らまほしき心地す。

◎由井正雪は、世人の徳川氏を憚りて書けるにて、その實の本字は松雪ありとぞ、曳尾庵が我衣には記せり。

◎近江の人について、源五郎鮎のいはれを聞けども答ふる人稀あり。今、近代世事談の説を擧ぐれば、

左の如し。此鮎湖北尾上島津といふ所にて取り、その所の長を源五郎と云ふ也、よつて此の名あり。又源五郎といふ漁人多く漁れば、我儘の價はぞ殘し、餘はまた放てり、此の事草紙物にあり。又云、元來夏頃鮎あり、初鮎は正月の末より取り、三月の末盛にして、四月夏に入るころ、此鮎多く捕るあり、常の鮎とは狀異あり、いつの頃にか源五郎と人の名によびあやまりけり。云々

◎……時んば」と云ふ語は、僧侶の偈を唱ふる時によく云ふ言あり、厭ふべき音便かと思へりしに、此頃富樫記を見しに「政無道に屬する時んば常に荆鞭を切り頻りに諫鼓をうつ」云々とあり、はやく四百年前よりの習ひありけり。

◎……手ぐすね引いて搦へたり」あどいふ語は、今日の新聞雜誌に多くある語あり、されば近頃出來し語あるかと思へりしに、和歌四天王の一人ある賴阿法師がものせる、水蛙眼目といふ書に、西行と文覺この事を記せる中に、「上人うちにて手ぐすねを引い

て、思ひつること叶ひたる躰にて、あかり障子をあけて出られけり」とあり。すでに南北朝ごろの語ありけり。

◎源三位賴政が「むもれ木に花さくこともあかりしに」の歌は、世俗の人埋木と心得て、朽ちたる木のこゝと思へるは誤りあり。無花果、和名ムモレギ、一名イチバク、和俗名トウガキといふ者これにて、この木は花さくことかくて實を結ぶ、その實秋に至りて、腹さけて赤し、ゆゑにこれを借りて歌の意に用ゐしありと、新井白蛾の牛馬問には記せり。

◎右の賴政のうたの下句、實のあるはてぞあはれありける」といふを、淺見綱齋は、天晴の意に非ずして、憐れの意にて、世人悠然と思へといふ心ありと論せり。其のゆゑは、賴政平治の亂に初めは義朝に與みして、後に平氏に従ひ、源氏の一族大方消滅して、殘れるも皆諸國に散居せるに、賴政獨り平氏に媚附して恥ぢず。たま／＼その兒が宗盛に辱しめられつるを今更のやうに怒りて、罪もあき以仁王を欺

き誘ひ奉り、益もあき軍をおこして、やがて宇治に敗死せしこと、實に智もかく勇もかく義もあき愚將あり、何をもて、彼が行爲を天晴のわざとせん、彼の歌若し頼政自身は天晴の心持にて作りしとすれば彼は益々おのが暗愚を自白するものあり。云々と満身感情より成れる綱齋の論として、一寸おもしろき言あり。

隨感小錄

樋口 無我

○世間百事 何故と疑ひ成程と悟りて進歩し行くあり何故と成程とがあくば百事休せむ學生の學科研究に於ける殊に然り玩味せよ『大疑の下に大悟あり』の一語

○懶惰生 學友の「試験勉強」せるを見て盗人捕へて繩縛せりと譏る然れども盗人捕へて繩縛ふ猶或は間に合ふべし汝は盗人の逃去りし後遽て役にも立たぬ繩を縛ふものにあらざるか玩味せよ『猶已むにもまさる』の一語

し『人の疝氣を頭痛に病むか』と冷笑する人往々あり嗚呼是れ何事ぞ人の疝氣を頭痛に病むは熱血男兒あり忠臣義士皆是れありこれにあらざる男は駄目あり

○人の感情を悪くさせて 無上の快樂とせるは實に下等の情操あり絶えず此情操を有するものは必定殘酷の人とあり了らむ慎むべし恐るべし

○學生の中には 字音を口又は筆にあらはすに長短清濁を交互に誤ること譬へば長短清濁の四字音を「チョ。ダン。セ。ラク。」と呼ぶ類案外に多し正確にすべきは小學校に於ける言語の訓練

○予が寓居の前を時々 フゲンノヲシへ〜と呼はり行くものあり何賣るからむと耳傾くれど猶フゲンノヲシへと聞ゆある朝餘りのいぶかしさに急ぎ立ちて之を視る其人賤しき風躰して古桶を片腕に通し居れり『桶の直し』といふを彼等の流儀に訛りてフケンナホシエーと呼ぶしかもフの音甚微かにケの音俄に高くて彼の如く聞えしありされど予の

○おのれ學科点数の少きを 耻ぢてか耻ぢずしてか巧に言を設けて曰く我等は点数の奴隷とあるを好まずと然り点数の奴隷とあるを好まざるべし其代りに他日世人の奴隷とあり了らむ

○徳川家康 晩年に園基を學び其味を解して曰く世の中の事は何にても習ふべし習置きてあしき事は一も無しと今の青年學生に必須學科の中を『よりぐひ』するものあり死後も家康に叱られむ

○予等の學生時代 朱唐紙又は紅唐紙といふもの持たぬはあし研究せる書籍に不審の處あらば之を齒にて缺取り唾にて其處に貼置き以て質問の便に供す故に之を不審紙とも云ふ予は同窓の先輩に皇朝史略の辨黨論を質問せし時『君のは丸で疱瘡か麻疹の様だ』と笑はれしことあり便利のものあれば近年之を買求めむとせしに何處の紙屋にも無し今の書生には此紙の必要あき結果かはた刻苦精研せざる結果か

○人の困難に同情を寄せて 云爲する者を愚物と爲

耳には今猶フゲンノヲシへと聞ゆあゝ不言之教〜我等教育者の常に反省すべきことにこそ感じけり是亦彼の桶屋が一種の不言之教を予に授けたりと謂ふべきか昔梅尾の高辨上人が馬の足と府生とを阿字不生と聞きかして感涙に咽びし話も思出でゝ實に面白し

軍事學野外勤務の概要

福永作十郎

陸軍野外要務令に曰く「軍の主とする所は戦闘あり故に凡百の事皆戦闘を以て基準とすべし」と故に軍事學を研究せんとする者は必ず戦闘の概念を以てせざれば其要領を了得すること能はず今左に述べんとする所は野外勤務の概要にして最も簡易なる歩兵の勤務のみ、其他兵科に亘りては稍高尚とあれば、専門家にあらざる學生に在ては其研究容易ならず、且學生は之が勤務を演練し能はざれば之を省く所以あり

歩兵の性能たるや、小銃を使用し、散開或は密集して戦闘するものにして苟も人の跋涉し得べき地に於ては仮令充分武裝したるときに在て巨大の障礙に逢ふとも、或は之を攀登し、或は之を跳越し、決して逡巡せざるにあり、故に歩兵の戦闘は、何れの地形に在ても實施し得べきものあり

野外勤務の種類を左の如くに區分し、中隊長以下の幹部及各兵卒の勤務に就き説明せんとす

- 一 戦闘行軍及警戒勤務の概要
- 二 戦闘行軍に關する命令の凡例
- 三 戦闘の要領
- 四 戦闘命令の凡例
- 五 斥候勤務の要領
- 六 前哨勤務及其配備の要領
- 七 前哨命令の凡例
- 八 夜間戦闘の要領

一 戦闘行軍及警戒勤務の概要

警戒隊を設け行進する軍隊（概ね長延の隊形を以て

べきものあれば三百乃至六百米突にて足れり

前兵は概ね前と同一の距離に尖兵を出す、尖兵は一分隊以上（一小隊以上に及ぶことあり）の兵を士官の指揮に属し廣く搜索をなす、其尖兵長は尖兵の先頭に在て行進し、前方に發生する事項を、速かに判別し、稍開豁ある地に在ては、所要に應じ斥候を派遣し、又村落若くは隱蔽地に在ては、多くは散開して行進し、通常二人の兵卒を前兵との中間に置き以て之と連絡を保持せしむべし

前衛は不意ある敵の眞攻撃に對し本隊を掩護すること最も緊要にして、敵の小部隊の如きは彼自ら危險に陷るを以て敢て顧慮するに足らず、蓋し前衛の背後には本隊の續行するを以て前衛司令官は決意前進すべきものとす

側衛は側方の警戒前衛の斥候のみにて充分あらざるべきに設くるものにして其兵力及編組は危險の大小と地形とに應じて定む、而して其勤務は概ね前衛に同じ（側衛本隊、側衛前兵、側衛尖兵と云ふ）

大道に由る）を戦闘行軍と云ふ、其警戒隊の任務は本隊に展開の時間を與へ、且僅少の障害（少數の敵或は通路の遮蔽物等）を除去し以て本隊の行進を滯りからしむるにあり、故に非常の奮勵を以て、周到なる搜索を行はざるべからず、而して此警戒隊は前進に前衛、退却に后衛を備へ又要すれば側衛を以て側面を掩護す、此警戒隊の兵力は大約歩兵の六分の一より三分の一に至る、

前衛と本隊との距離は我軍の目的、兵力、敵軍に關する顧慮及地形に應じて異なるものにして、要は本隊をして、時機を失せず、戦闘展開を確切からしめん爲め之に適する距離より遠大あらざるを適當とす前衛は之を前衛本隊、前兵に區分す、前兵は前衛歩兵の四分の一乃至三分の一（勉めて建制部隊を要す）を以てし、前衛本隊との距離は敵と衝突の際前衛本隊をして、戦闘展開を爲すの時間を得せしむるに足るを度とす、小なる前衛に在ては前衛本隊有効射撃（千米突以内）の下に不意の敵襲を受けざるを度とす

後衛は本隊の退却に時間の餘裕を與ふるものにして其戦闘に方りては、前衛の如く本隊の援助を心算するを得ず、故に後衛は地形の應用を巧にし、敵を遠距離の外に壓し敵をして展開し或は迂回せざるを得ざらしむるを要す、而して其兵力は前衛よりも強大あるを要し其編組は概ね前衛を逆にせしものに同じ（後衛本隊、後兵、最後に後尖兵を置く）

二 戦闘行軍に關する命令の凡例

命令は最も慎重あるを要す、一たび命するや毫も寛假することなく必ず果さしむべし、故に命令は變遷測り難きときは殊に簡短にして細事に涉らざるを要す、而して此作戦命令は各團隊の稱號（某師團命令）を冠し或は部隊の名稱（前衛命令、前哨命令等）を冠し之を區分す

演習に在ては命令に先ち其組立て所謂想定を示す、此想定を示すには全隊の能く知悉し得る如く最も明瞭に傳ふるを要す、故に此間全隊は休止の姿勢を取らしめ方向の如きは之を指示し、要すれば距離及戦

闘地の概況をも示すを可とす、之に反し命令を下すに方りては必ず嚴確ある姿勢を取らしめ最も嚴かに下すへし、即ち此命令は軍人の本分を盡すべき秋あればあり

凡例 想 定

伊勢灣に上陸したる東軍(侵入軍)は東海道を京都に向ひ前進中其一部を彦根方向に派遣したり、西軍(國防軍)は混成第十八旅團を大垣に向ひ鉄道輸送中歩兵一大隊を米原に下車せしめたり、其任務は旅團の輸送を援護するに在り

情報に依れば敵の歩兵約二中隊は三月十日午後六時頃八日市に達したるものと如し

大隊命令 三月十一日午前七時
於 米 原

- 一、敵は八日市附近に達したるものと如し
- 二、大隊は米原停車場援護の爲め犬上川以南に進出せんとす

三、第一中隊は前衛とあり中山道を石橋に向ひ前進せし

宜しく之に應せんが爲には屢々實地の勤務に就きて之を演習せざる可からざる雖も學生に在ては反復之が演習を爲す能はず依て爰に戦闘の原則二三を示す

- 一、寡兵を以て衆兵と戦ふは之れ則ち敗るゝの原あり故に所要に充たざるの兵數を漸次増加するが如きは過失あり

- 一、歩兵戦闘は火力を以て決戦するを常とす、故に火兵の使用に尤も注意せざる可らず、即ち遠く掃射し得べき地形を占領するを要す
- 一、戦闘の隊形は散開隊次を適當とす、之れ歩兵の主要なる戦闘法あり
- 一、中隊の戦闘正面幅は百米突を著しく超過せざるを度とす

- 一、戦闘線翼に隣隊若くは天然の障害物あきときは熟練ある長に若干の兵卒を附し戦闘斥候を出し側方の監視に任す
- 一、攻撃は遭遇戦と豫め防禦配備をかしたる陣地の攻撃とに區分するを以て原則とす

四、某中尉は一小隊を率ひ左側とあり野田山、土田及西甲良を経て目加田に向ひ前進せし

五、殘餘は本隊とす

六、大行李は本隊の後方約二千米突に在て行進すべし

七、予は本隊の先頭に在り

教令(演習の時に限る)

- 一、敵は帽の日覆を附す(或は脱す)
 - 二、空砲何發迄を使用し得
- 此命令を受け前衛司令官たる第一中隊長は部下中隊全般に前衛命令を下す、其編成は一小隊を前兵とし下士の率ある一分隊の斥候を東海道鐵道線路より賀田山茂賀に派遣し前進す、前兵長は其小隊より一分隊の尖兵を出し中山道を前進せしむ、此前衛各部は概ね前衛本隊、前兵、及尖兵間の各距離を約三百米突とするを可とす

三 戦闘の要領

抑も實戦の状況は千變萬化殆んど極まりあきを以て

遭遇戦に在ては先頭部隊は後續部隊をして其開進に要する時間と地域とを確實に得しむるを要す之が爲め前衛等の先頭部隊は此要旨に従て動作し一には敵に先んじ展開すべし、故に各指揮官は先頭にあること緊要あり、然るときは速かに適當の命令を下すを得るものあり

- 一、防禦を行ふは總指揮官豫め計畫を定むるを要す
- 一、防禦を行ふには村落、高地、森林、隘路等を用ひ特に火器の効用を竭すを肝要とす、此目的に基き陣地を撰定し且人工を以て之を堅固にす
- 敵の攻撃方向を知るや地形に應し必要ある兵力を用ひ、前地の要点に至る距離を測定し多數の彈藥を準備するを要す

單に防支のみを主とする防禦(前哨、後衛等)は通常其陣地を保守するを以て限りとし、之に反し勝利を期する防禦は攻撃動作を併せ行ふ、故に總豫備隊を設け多くの場合には之を戦線の一翼後に置